

幻の広浜鉄道・今福線シンポジウム開催を目指して

盆子原 照晶

1. はじめに

今年度で5年目となる今福線研究分科会。昨年、完成した今福線マップを久保田章市浜田市長に報告させていただく機会を得た。久保田市長は政策として観光を一つの柱としており、今福線を観光資源としてぜひ活用してほしい、との言葉をいただいた。さらに、シンポジウムを開催して大々的にPRしてはどうかのご提案までいただいた。その後、浜田市とシンポジウム開催に向けて協議を重ね、昨年9月、広浜鉄道今福線を活かすシンポジウム実行委員会（以下、実行委員会）が発足した。本稿では、シンポジウム開催に向けて、現状の取り組みから課題を整理し、今後の展望について考察する。

2. 島根県及び浜田市の観光動向

ここでは、島根県及び浜田市の近年の観光客数、宿泊客数の推移をみる。

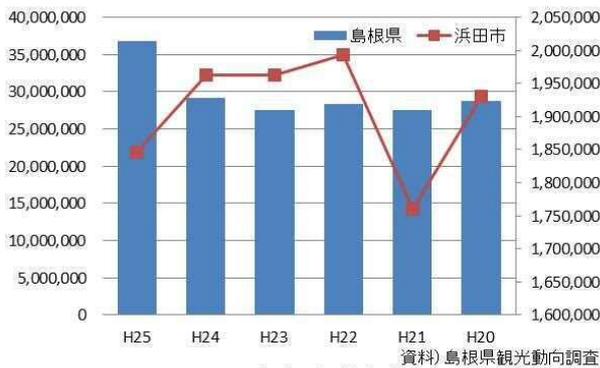


図 観光入込客延べ数

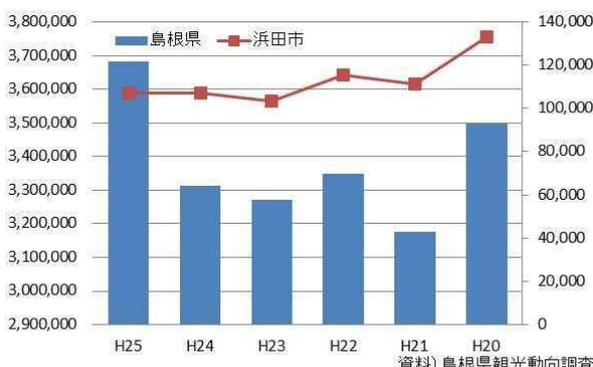


図 宿泊客延べ数

観光入込客延べ数の推移をみると、島根県は平成25年に大幅に増えている。各市町村の数値をみると、出雲市が500万人増となっており、これが県全体の数値を押し上げている。一方、浜田市をみると、平成22年から減少傾向が続いている。

次に宿泊客延べ数の推移をみると、島根県は平成25年に大幅に増えている。市町村別の数値をみると、松江市の宿泊客数が他市町村よりも圧倒的に多く、松江市の宿泊客数も平成25年に大幅に増えている。一方、浜田市をみると過去5年間は11,000人台で推移しており、大きな変化はみられない。

今後、観光に力を入れる浜田市としては、近年落ち込んでいる観光客数を増やすために観光資源となるコンテンツを作っていくことが求められる。

3. 今福線沿線自治会の現状と課題

2014年9月30日、実行委員会が発足した。目的は「今福線の観光ルート

化と活用策を考えるシンポジウムの開催」と「今福線の価値の発信、交流人口拡大と地域活性化に資する活動につなげること」である。実行委員会は、島根県技術士会のほか、浜田市や今福線沿線の自治会によって構成された。

第1回目の実行委員会では、一昨年、昨年と技術士会が主体となって実施した今福線の現地調査の結果報告を行った。調査結果から観光ポイントとして見どころとなる5か所を選定し、そこから重点的に整備していくことを伝えた。自治会内に重点箇所が含まれていない地域から多少の不満の声があった。そもそも鉄道遺構だけで観光ルートを作ると、マーケットが過小である。いわゆる鉄道オタクだけがターゲットになってしまう。鉄道オタクだけでなく、老若男女が楽しめる観光ルートを構築することができれば、鉄道遺構としての新たな価値を発掘したことになる。

そのため、第2回実行委員会では「地域の自慢大会の開催」を提案した。これは、先述の重点箇所が含まれていない自治会も一体となって観光ルートが構築できるように、鉄道遺構以外で、地域で自慢できるものを再認識し、さらに他の自治会と共有することで沿線としての一体感を高めることを狙ったものである。ワークショップ形式で行うため、各自治会の中で議論をしていただくことが必要となるが、この提案が議題になったとき、各自治会で温度差があることが分かった。事前に自治会内でワークショップを行って意見出しをすると宣言する自治会もあれば、そもそも実行委員会が立ち上がって今福線を観光資源化する動きがあることを自治会長以外はまだ知らない、といった状況の自治会もあった。

観光客を受け入れるということは、その地域が地域の資源の価値を認識し、誇れるマインドを持っている状況と同義であることが理想だ。そうでなければ観光客に対して「うちの地域には何もない」と言ってしまいかねない。それは“期待をして来た”観光客に対して失礼であり、クチコミなどで地域の評価そのものを下げてしまう可能性さえある。そういった点で、各自治会の温度差を高いレベルに引き上げ、沿線としての一体感を醸成していく必要があり、克服しなければならない課題である。

4. シンポジウム開催とその後の展望

本稿では技術的な考察ができなかったが、課題を正しく認識し、解決に向けて適切なアプローチをとっていくことは、技術士に求められる課題解決能力という点で変わりはない。今年8月にシンポジウムを開催するがあくまで通過点の一つであり、沿線の各自治会の温度差解消と一体感醸成は、今福線を観光ルート化し、観光資源として活用し続けていくために必要である。まずはこちらから自治会の歴史などを理解することから始めたい。(了)